



Title	<紹介>伊井春樹著『与謝野晶子の「源氏物語礼讃歌」』
Author(s)	宮本, 正章
Citation	語文. 2011, 97, p. 67-68
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69186
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

伊井春樹著『与謝野晶子の「源氏物語礼讃歌」』

宮本正章

昨年、伊井先生のご講演「与謝野晶子の源氏物語礼讃歌の成立」を拝聴して、それは晶子が上田秋成の「源氏物語五十四首短冊貼交屏風」を、大正六年（一九一七）六月八日か十一日に、大阪府池田町（当時）の実業家小林一三（逸翁）邸で見たことに起因していると知り、以後、実見したいものと、思い続けていた。

今年、逸翁美術館で開催された「与謝野晶子と小林一三」展（四・一～六・一二）で、秋成の「源氏物語短冊屏風」や「源氏物語礼讃歌」の成立を告げる晶子の小林一三宛書簡（大正九・一・二五）を見て、昨年以来の渴きを癒すことができた。

さて、本書の成り立ちを著者は、「展示の『図録』」を編集するため、さまざまな資料を調べ、読むにつけ、掲載予定の解説だけでもとてもスペースが不足したので、あらためて一書にすることにした」（あとがき）と述べておられる。私は、これは『図録』と本書が相補い合って、「源氏物語礼讃歌」が理解できるようになっている意味だと理解している。また、本書には、「源氏物語礼讃歌」成立に繋がる文学活動とそれを生み出す、晶子・鉄幹の実人生が丹念に描かれているが、それは、著者が多くの資料を読まれた結果、「源氏物語礼讃歌」が「秋成の屏風を閲覧し、その感動によって（これが）生まれたという単純なストーリーではな

く、晶子が文学活動と葛藤しながらの生活と密接な関係があることを知った」（あとがき）というところから来ているのであろうと思った。

晶子が秋成の「源氏物語短冊屏風」に出会うのは、五歳の子を伴つての夫鉄幹との関西・九州への「歌行脚」の折であった。大正六年五月二十八日大阪着、小林一三と並ぶ、与謝野家の経済的援助者小林政治（号天眠）宅での、新聞記者のインタビューには、鉄幹は、病後の気保養で、ほんの同好者だけに歌を揮毫するつもりとか、晶子は、大阪の研究をするつもりとか、始めての歌行脚にふさわしい言辞を弄しているが、著者が大正六年五月十六日付の小林政治宛鉄幹書簡や小林天眠著『毛布五十年』の「歌帖『泉の壺』」を引いて、述べておられるように、「直接の目的は収入を得ることにあり、一週間ばかり滞在し、その間に短冊、色紙、半折、全紙を揮毫して販売し、三、四百円の収入を得たいとの願い」（一）晶子の大坂行き）であった。また、同書簡のなかの「薄田君など二御話し下さつて各種の新聞に私共の来坂して数日間滞在する旨を書いてお貰ひ下さい」は、「評判を高めることによつて人々に購買意欲を持たせ、作品の販売を促進したいとの思いによる」（一）と分析しておられる如くであろう。さらに、同書簡中の「この発起人ハ薄田君、高安夫人、貴兄の三人に願はれませんか」とあるのを、「鉄幹は天眠へ揮毫するにあたつての発起人まで指定し、浪漫派詩人として知られ、当時『大阪毎日新聞』の学芸副部長として勤めていた薄田淳介（泣董）、関西の女

流歌人として知られていた高安やす子の名をあげる。これらも、露骨に収入を得るための大坂行きというのではなく、あくまでも発起人から求められて関西に赴き、その機会に揮毫をするという体裁をとりつくるためであった」〔1〕となかなか手厳しい解釈がなされているが、その通りであろう。関西では、晶子たちは六甲山苦楽園に宿を取り、天眼、高安やす子の奔走で集められた同好者に販売する色紙などを、揮毫し続けた。

晶子が秋成の「源氏物語短冊屏風」を見たという記述は、大正九年（一九二〇）一月二十五日付小林一三宛晶子書簡に出ている。この書簡から著者は「源氏物語礼讃歌」の成立を「一三は大正六年四月に秋成の『詠源氏物語和歌』の屏風を購入し、こよなく愛玩していたようで、同年六月、自邸に招いた晶子に、『このようない作品を、つい最近手に入れた』と披露したのである。彼女はつくづくとその屏風をながめ、一首ずつの歌を読むにつけ、感動を覚えるとともに、自分でもこのような和歌を作りたいとの思いに駆られたに違いない。それが滝田橋蔭の強い勧めもあり、大正八年の暮に一気に詠みあげ、翌年の一月、一三に前述の「源氏物語礼讃歌」の短冊五十四枚を送ってきた背景と思われる」〔〔8〕「源氏物語礼讃歌」の短冊〕とされている。さらに、「礼讃歌」が詠まれたもう一つの理由を、「大正六年に身重の体ながら『歌行脚』として大阪・九州をめぐり、帰京後の九月に六男『寸』を出産するものの、二日後に亡くなってしまう。文筆活動にひたすら専念することによって、しいて平静さを保とうとする必死な晶子

の心根は、その姿を知れば知るほどむしろあわれさを覚えずにはいられない。悲しみから逃避して没頭しようとしたのが『源氏物語』の世界であり、そこから供養の思いもあって『源氏物語礼讃歌』が生み出されたのではないかと想像してみたくなってくる」（あとがき）と述べられる。これは大変興味深い見解である。

本書の構成は「〔1〕晶子の大坂行き、「〔2〕関西、九州への旅の成果、「〔3〕歌人仲間河野鉄南、「〔4〕晶子の歌行脚、「〔5〕『源氏物語講義』の執筆、「〔6〕鉄幹の欧洲遊学、「〔7〕鉄幹の悲運と晶子の悲しみ、「〔8〕『源氏物語礼讃歌』の短冊」となっている。これは明治三十年（一八九七）七月の浪華青年文学会の機関誌『よしあし草』の創刊からが、「源氏物語礼讃歌」の成立に繋がるとされる構成であるが、紹介では「〔3〕・〔5〕・〔7〕などは、全く触れることができなかった。〔6〕には「晶子は、夫鉄幹のために資金を調達するという運命に半生を捧げた人生ではなかったか」とあるが、本書に通底するものは、晶子への著者の愛憐の情である。

（思文閣出版、一〇一一年三月、二二四頁、一四七〇円）

（みやもと・まさあき 本学大学院博士後期課程）